

(1) 学習・授業関係 (C類型グループ)

ア. 研究主題：病弱教育における重度重複障害児一人一人の実態に即した指導

イ. 主題設定の理由

本校では、全校児童生徒21名中、重度重複障害のある児童生徒が7名在籍している。また、教師集団としては重度重複障害のある児童生徒の指導を経験したことのない教師が多い中、指導の根拠となる実態把握の方法について学校としてのツールや枠組みがなく、個人の力量に委ねられている状況がある。そこで、客観的に実態を捉える方法を検討し、より実態に応じた指導を行うことで、児童生徒の表出や主体性を引き出した授業が展開でき、さらに、学校全体の財産として積み重ねていきたいと考え、本研究主題を設定した。

ウ. 研究仮説

生徒の実態を的確に捉えることで児童生徒の表出や主体性を引き出すことができるのではないかと。

エ. 研究内容・方法

- (ア) 実態把握の方法を検討し実施
- (イ) 実態把握に基づき指導案作成
- (ウ) 研究仮説検証のための授業研究の実施
- (エ) 研究の仮説検証・成果と課題の検討

オ. 推進計画

月	内 容
7 月	・ 研究主題、仮説、研究内容・方法の検討
9 月	・ 推進計画の確認、実態把握の方法検討、授業研究の対象児童生徒決定 ・ 授業研究の授業者決定、実態把握（MEPAⅡ、新版K式）の実施
10 月	・ 実態把握（学習到達度チェックリスト、ボディダイナミクス）の実施
11 月	・ 指導案検討（生徒観、教材観、指導観、本時の展開、研究協議の観点） ・ 指導案検討
12 月	・ 研究の仮説検証・成果と課題の検討

対象学年：高等部３年	
単元名：秋の素材で楽器を作ろう（美術）	
生徒の実態	・ 高等部３年、先天性筋緊張低下による四肢機能の障害 ・ 提示された物や素材など様々な物に興味を示し、自ら手を伸ばすことができる。 ・ 周囲からの刺激に敏感であり、興味が持続しないことから、活動をこまめに区切って取り組んでいる。 ・ 人や活動に期待する気持ちが育ってきており、人や物への注視や追視、手を伸ばすなどの動作で、人とかわろうとする様子が増えてきている。 ・ 操作活動では『引っぱる』『摘む』『入れる』『押す』『たたく』などの活動ができる。 ・ 活動に対して「自分でやりたい」という自我が育ってきているが、『用途に応じた動き』と『感覚刺激を楽しみたい気持ち』との発達の葛藤が見られる。 ・ 「ちょうだい」や「入れて」など動作を伴う言葉に対して理解することができるようになってきている。 ・ 『学習到達度チェックリスト』では、スコア８までは概ねクリアしているが、スコア１２あたりから■が増え、スコア１８から上の段階ではほとんど困難という結果であった。本学習では、学習到達度チェックリストの結果を参考に、できることを大切にしながら、習得しつつある能力を課題として授業に取り入れた。特に【親指と人差し指で物をつかむ】、【両手で物を操作する】、【なぐり描きをする】、【大人が指さした方向を見る】、【相手のしぐさを見て真似をする】に取り組んだ。
本時の目標	・ 秋の素材に興味をもち、触れたり見たりすることができたか。 ・ 提示されたものや手元に注目して活動に取り組むことができたか。 ・ 完成した作品に興味をもち、触れたり音を鳴らしたりすることができたか。
本時の内容	○落ち葉の中からどんぐりを探そう！（秋の素材に触れる。） ○クレヨンでなぐり描きをする。 ○どんぐりを容器に入れる。（どんぐりに絵の具をつける。） ○どんぐりを画用紙の上に広げ、転がしながら色をつける。 ○作品の発表・音楽に合わせて楽器を演奏し鑑賞する。
本時の評価	・ クレヨンでなぐり描きする活動では、台紙に注目しながら取り組むことができた。教師と一緒にクレヨンを握るように支援していたが、生徒一人でなぐり描きに取り組めるようにするには、持ちやすい形状の工夫が必要である。 ・ どんぐりを容器に入れる活動では、大きさの違う容器を複数用意し、活動の難易度を変えることで生徒の意欲をより引き出せるのではないかと考える。 ・ 完成した作品を鳴らす活動では、教師の動きに注目するあまり、楽器を振ることに意識が向いていない様子が見られた。教師は手本を見せた後手を止め、生徒の演奏の時間をたっぷり取るようにしたい。

[illegible]

© 2014 Yutaka Tokunaga

※本チェックリストは、編集『障害者の重い子ども』の目録設定ガイド』を購入した方が使用許諾の対象です。購入せずに使用することは、著作権法上での例外を除き、固くお断りします。

※本エッセイは、書籍『世の重なり』を購入手こもの日橋啓足が、文芸評論家として、
※本エッセイは、書籍『世の重なり』を購入手こもの日橋啓足が、文芸評論家として、
※本エッセイは、書籍『世の重なり』を購入手こもの日橋啓足が、文芸評論家として、

『障害の重い子ども』の目標設定ガイド』より
豊徳永義塾大学出版会株式会社

カ. 仮説の検証

仮説：「生徒の実態を的確に捉えることで子どもの表出や主体性を引き出すことができるのではないか」

仮説を検証するために、グループ内で様々な検査方法を用いて生徒の実態把握を行った。大きく分けて運動面から『ボディダイナミクス』、『MEPA - II』、認知面から『遠城寺式・乳幼児分析的発達検査』、『新版 K 式発達検査』、『学習到達度チェックリスト』を使用し、その中から対象生徒に適した検査をグループ内で検討した。今回は生徒の身体の状態や活動への制限などの実態を踏まえ、『学習到達度チェックリスト』を活用して仮説の検証を行った。

『学習到達度チェックリスト』は乳幼児の発達を手がかりに初期発達段階にある子どもの学びを整理したものであり、各教科(知的障害)の内容について各段階の内容を踏まえ、具体的な指導内容を明らかにしやすいといった特徴がある。

本研究授業では、チェックリストから各行動項目を吟味して生徒の課題を導き出し、行動を達成しているかについて○(達成)、△(芽生え)、■(難しい)のようにチェックを行った。その中で、これまでの体験をもとに授業での新たな体験を主体的につなげることを目的として、今できる課題(引っ張りひもで引く)とあと少しでできそうな課題(親指と人差し指で物をつかむ)、一つ上の段階の課題(なぐり描きをする)を設定し、授業内容を構成した。また、今回の授業ではチェックリストから取り入れた課題や内容だけでなく、生徒の行動の特徴など日常の観察から教員同士で実態把握を行い、それらを踏まえて研究授業のねらいを決定した。

このチェックリストを活用して研究授業を行ったことで、生徒の実態を客観的に捉えることができ、授業を組み立て、指導する上での根拠となるなど、仮説を検証する上で有効な手段だったと考える。しかし、目標達成に向けて子どもの主体性を引き出すためには、より丁寧で段階的な支援を工夫する必要がある、課題も多く残った。

キ. 成果と課題

今回の研究を始めるにあたり、本校の重度重複の児童生徒の実態把握をするためのツールや枠組みがないという点に焦点を当て、客観的なアセスメントの方法を模索した。グループ内で様々な方法を試し、発達段階や生徒の課題を検証できたことは、それぞれの教師にとって大きな収穫になったと考える。そして、今回使用した『学習到達度チェックリスト』を活用することで、教師の思いや考えだけで授業を構成するのではなく、ねらいや指導の根拠となるものが明確になり、客観的な実態把握をするためのツールとして役立てることができた。

『学習到達度チェックリスト』の活用についてグループ内で話し合った結果、「検査の方法が簡単で取り組みやすい、言葉がわかりやすく具体的に書かれている、実態から目標設定がしやすい、カテゴリーが分かれていて発達段階にそって課題が書かれているため、次のねらいに結び付けやすい、エクセルデータが操作しやすい」などの声が上がった。今回対象とした生徒以外にも本校の重度重複の児童生徒に使用できるアセスメントの一つであり、教師間で共有できるツールとしても活用していけるものと考えている。

研究授業では、このリストから導きだされた課題を取り入れて授業を構成したが、あくまで指導を裏付けするためのものであり、日常の観察からも実態把握を行い、それらを踏まえて授業の展開を工夫した。例えば、日常の生活の様子から生徒の集中力を考慮して授業の展開を早くするなど、日々の実態把握と照らし合わせながら授業を組み立てた。

今回は美術の授業で研究授業を行い、その後の研究協議で出された良い点、改善点を以下にまとめた。

良い点
○教材・教具の工夫
・子どもが好きな音の鳴る教材を使用し、興味関心を引き出すことができていた。
○チェックリストの活用
・客観的な実態把握ができていた。 ・「ちょうだい」や容器のふたをしめようとするなど、チェックリストの課題や項目を授業に取り入れていた。
○授業の展開の仕方
・興味を持続させるために展開を早くし、気持ちごとぎれないように様々な活動を取り入れていた。 ・得意なことやできる動きを取り入れることで、主体性を引き出すことができていた。

改善点
●教材・教具の工夫
・指先でつまめていないときがあった。 →つまむ、入れる物の大きさや形状の工夫により手元に集中できるのではないかと意欲が継続しないため、本人に合った丁度よい大きさを課題に取り組めると良い。 ・なぐり書きを行うための段階的な支援の必要がある。 →ペンの握り方を工夫し、補助具を使用する。バインダーでは書く場所が狭いため、大きな紙になぐり書きするなど、最初はダイナミックに線を書く場を設定する。 ・両手でファイルケースを持てるように取っ手をつけるなどの工夫をする必要がある。 ・落ち葉の中からどんぐりを見つける課題は難しいため、片方に葉をよせるなどの配慮があると良い。 ・どんぐりは小学生の頃から取り組んでいる素材だと思われるため、秋の素材を授業で使用する際にはこれまでどの様に使用してきたかを確認する必要がある。
●教師のかかわり方
・正しい操作ができたときの強化のめりはりと良い。活動が定着するために生徒への振り返りの仕方、声かけを工夫する必要がある。 ・やるべき課題を明確に提示できるよう、どんぐりを皿に二つ置くなどの配慮があると良い。 ・興味関心をもって「つまむ」「入れる」活動を行うための言葉かけが必要。

●他教科との関連性、系統性

- ・今回作った楽器を音楽の授業で実際に使用するなど他教科と関連させられると良い。
- ・自立と美術の違いをどう捉えるか。また、「つまむ」という目標は美術という教科で扱うには難しいのではないか。
- ・高等部3年生として物の操作をどこまでねらうのか明確にする必要がある。

研究協議を受けて、グループ内で話し合いを行った。

今回の研究授業では、生徒のできる動きだけでなく少し難しい課題も取り入れて授業を構成した。授業を通して、昨年度までは手の平全体で物をつかんでいた生徒が、対象となる物をよく見て指先でつまむ動きができるようになってきたことに成長を感じている。また、今回の授業で取り組んだ「なぐり描き」を行う場面では、より段階的な手立てが必要であったが、現在は見やすさを工夫することで「なぐり描き」をしようとする場面が増え、支援の仕方によって次のステップにつながることを実感することができた。

課題として、今回対象とした生徒にとって『学習到達度チェックリスト』は活用しやすいものであったが、生徒の実態によっては活用しにくい場合もある。また、チェックリストを活用することで、ねらいや課題が活動の根拠として導きだすことはできたが、それを達成するための支援の方法はより工夫していく必要がある。そして、何よりも生徒の実態から授業を構成していくためには学習指導要領を踏まえた授業を行うことが大切である。研究協議の中でも意見が出ていたが、自立活動と教科としての美術の違いを区別して捉える必要がある。学習指導要領をおさえた上で、今の児童生徒の現状と課題を把握し、チェックリストの目標となる行動を参考にすることはできるが、これだけで授業づくりを行うことは不可能である。目標を達成するために、どのような状況で、どのように支援することが必要なのか、具体的な指導内容や方法を明確にイメージすることが重要であることが検証を通して改めてわかった。

授業を行う上で、教師が一人で生徒の学習を組み立てるとどうしても偏りがでたり、その学習でねらうことがずれたりしてしまうことがある。そこで客観的に実態把握をすることができる『学習到達度チェックリスト』を使用することで、学習内容のバランスを考えながら系統的な学習を組み立てることができ、次の学習内容の指標となるものとして活用することができる。大事なことは、このリストをもとに、具体的にどのような支援が必要なのかを考え、将来を見据えて今身につける力や将来必要な力は何なのかを見極めながら『学習到達度チェックリスト』を活用していけると、より子どもの主体的な表出や動きを引き出ししていけるのではないかと考える。

ク. 引用・参考文献

著者：徳永 豊 発行年：2014年10月20日

『障害の重い子どもの目標設定ガイド』 発行元：慶應義塾大学出版会株式会社